京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十九卷　第五號

大正十三年十一月一日發行

論叢

娯樂稅の構成……法學博士　神戸正雄
フィアカントの社會學論……文學博士　米田庄太郎
獨占の本質……文學博士　高田保馬
天保時代の西陣……經濟學博士　本庄榮治郎

時論

小麥及小麥粉關稅引上是非……法學博士　河田嗣郎
營業稅廢止論を評す……法學博士　小川鄉太郎

說苑

リカアドの價値論に就て……經濟學士　森耕二郎

雜錄

政府の輸出貿易振興策に就て……經濟學士　谷口吉彥
獨逸最近の乳兒死亡率……經濟學士　岡崎文規

說苑

リカアドの價値論に就て（一）

森　耕二郎

目次　緒言　第一　所謂『相對價値』（以上本號掲載）　第二　勞働の意義　結論

緒言

價値論の歴史に於て、一の貨物の價値の決定――價値の本源およびその測定――を、それが生産若くは獲得に費されたる勞働に求めんとする所謂勞働價値論が、客觀的價値論の代表的なるものとして、諸々の主觀的價値論と相對して、極めて主要なる地位を占めてゐることは、恐らく何人と雖も認めざるを得ないであらう。姑らく英國正統學派にのみ就て見んに、アダム・スミスの價値論は決して純然たる勞働價値論と云ふことを得ずして、そこには費消勞働價値說と支配勞働價値說とが並び立てられてゐる結果、現實の經濟社會に於ける貨物の交換價値は一種の生産費說（支配勞働價値說の變形）に依つて說明せられて居るのであるけれども、猶ほ彼が、貨物の生産に

費されたる勞働——骨折、困難——のその價値の決定を支配するものなることを多分に顧慮せるものなることは爭はれない。リカアドも亦終始その勞働價値論を一貫することができずして、遂に或種の制限の下にそれを支持するに至つたのであるから、彼を純粹なる形に於ける勞働價値說の忠實なる主張者と云ふことができないのであるけれども、猶ほ且つ彼をしてスミスの本來の形に於ける勞働價値說を成形發展せしめ、自己の經濟理論(分配論)の根本的出發點となすに努たるものとして、リカアドを正統學派に於ける勞働價値論者の最も忠實熱心なる代表者と認むる學派に於けるその他の學者、例へばヂェイムス・ミル、マルサス、マカロック、シニオア、タラに不可はないであらう。(註)正統ンス、ヂェイ・エス・ミルなども、或は忠實に純然たる勞働價値論を支持信奉せんとし、或はそれが修正若くは變改に努力したのであつて、要す所、正統學派に於ける價値論は、勞働價値論を中心として、そが本來の形に於ける主張、およびそれの修正若くは轉形に終始したものと云へるのである。かくて第十八世紀の末葉より第十九世紀の中葉過ぎに至る間、勞働價値論(その純粹なる形に於ける、若くは修正、轉形せられたる形に於ける)は、經濟價値學界を風靡したものであつて、ヂェイ・エス・ミルの如きは、『幸にも、價値の法則に於て、現在ならびに將來の學者が瞭らかにすべく殘されたるものは何もない。價値の理論は已に完成されてゐる』[1]、と云へる程であり、ゴッセンの主觀的價値論の提唱[2]も何等の反響をも惹き起すことなくして過ぎ去るの有樣であつた。

(註) リカアドの價値論は、彼れの經濟理論(分配論)——地代、利潤、勞賃の問題——と必ずしも密接の關係を有つて居ら

1) Mill, J. S., Principles of Political Economy, Ashley's ed. B. III. p. Ashley,
2) Gossen, H. H., Entwickelung der Gesetze des Menschlicheu Verkehrs, 1854.

ぬ、と云ふものがある。例へばヂイド[3]の如し。しかし私はこの解釋に承服することはできぬ。

しかるにこの勞働價値論を以てしては、貨物の現實の交換關係を充分に說明すること能はざるや、それが修正若くは轉形の試みの起るとともに、一八七〇年頃に至りて、貨物の交換價値の決定をそれが效用若くは主觀的價値にかゝらしむる所の所謂主觀的價値論が、殆んど時を同じうして、メンガア、ジエヴンス、ワルラスによつて有力に主張せらるゝに至り、その後に於ても幾多有名なる主觀的價値說の代表者の擡頭を見るありて、主觀的價値論は殆んど價値學界を支配するに至つた。而してその勢力の旺んなることは、その間に、最後の若くは最も完熟せる形に於ける勞働價値論とも云ふべき、マルクスの價値論の現はるゝことがあつたけれども、學界はそれに充分なる顧慮を與へるに吝であつた程である。かくて正統學派に於ける勞働價値論は漸次その地歩を失ひ、現今に於ては殆んど全く終熄してしまつたかの觀がある。マーシャルの價値論に於ては、勞働はたゞ價値決定の半面の理由をなすに過ぎないのである。貨物の價値決定を云爲するには、どうしても主觀的價値論を顧みざるを得ない、と云ふのが、現今學界の一般的狀勢なのである。

正統學派が彼等の勞働價値說を以て、貨物の現實の價値現象若くは交換關係を說明せんとして、そこに一の障礙に逢着し、遂にそれを或種の制限の下に支持し、若くは一種の生產費說と妥協せざるを得ざるに至つた經路は、或る意味に於て正に當然であるとせざるを得ない。しかし乍ら私は、一般的に、貨物の價値を、それが生產に費されたる所の勞働によりて、客觀的に決定せ

3) Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques, p. 163.

んとする勞働價値論が、一般主觀學者の信ずるが如く、經濟價値の決定に何等本質的なる重要を有つて居らぬの故を以て、彼等勞働價値論者は、その價値論を修正若くは轉形するに至つたのであると云ふのではない。彼等がかくせざるを得ざるに至つたのは、實は、彼等に於て勞働價値論そのものに對する充分なる理解が缺けてゐたからであると思ふ。

まことに正統學派に謂はるゝ所の、勞働價値論は、猶は粗朴未成形の域を脱せず、未だ經濟價値の説明としての勞働價値論として、不充分のものであつたことは爭ふことができない。しかし乍ら私は經濟價値を瞭らかにするに就ての正當なる方向若くは指示は、不充分乍ら、已に大體に於て、それらの勞働價値論の裡に於て見出すことができるのではあるまいか、と思つてゐる。かくて私は、正統學派の勞働價値論を批評するに當り、自ら、從來の勞働價値論の修正者それ自身、ならびに主觀學派のそれに對する態度とは異なる態度をとらざるを得ないのである。この態度をば、前期の勞働價値論（マルクスの勞働價値論を後期のそれとするに對してかく云ふ）の殿將にして、且つその最も有力なる代表者たるリカアドの價値論に對する批評に於て、瞭らかにして見やうとしたのが、この論文の趣意である。而してこのことは、リカアドの所謂交換價値、相對價値そのものゝ内容如何を檢討吟味することにより、最もよくその目的を達することができやうかと思ふ。蓋し彼れの交換價値若くは相對價値に對する不充分なる理解若くは態度は、軈て彼がその本來の形に於ける勞働價値論を終始一貫して支持することができずして、遂にそれを或種の制限の下に置かざるを得ざるに至りし直接の原因を成すからである。

以下私は、先づ第一に、一般的にリカアドの所謂相對價値とは如何なるものなるかを說明し、次に價値構成に與る所の勞働に就ての彼れの見解をたづね、彼が謂ふ所の相對價値および勞働が、勞働價値として、將た又それが內容實體を成す所の勞働として、如何になほ不充分なるものであつたかを見ることにより、彼れの勞働價値論が遂に一種の生產費說に墮して行つた所の根源を、卽ち彼が價値と生產價格とを混淆するに至りたる根源を、突きとめて見たいと思ふのである。

第一　所謂『相對價値』

一

リカアドの所謂『相對價値』の如何なるものなるかを吟味せんとするに就ては、先づ彼れの價値論の大要を知つて置かねばならぬ。その細目の諸點を措けば、彼れの價値論は已に一般に知られてゐて、今更こゝにそれを贅する迄もないのであるが、たゞ研究の便宜上極めてその大要をこゝに述べんに、リカアドはスミスと同じく、價値に交換價値と使用價値とを認めてゐる。而して使用價値たる效用は、交換價値發生の不可缺の條件を成すものであるが、それは交換價値の測定には何等關する所がないとして、彼は交換價値に就てのみ云ふ。次に彼れによれば、貨物には勞働により任意に增加し得べきものと、然らざるものとがあるが、後者卽ち任意不可增性の貨物の交換價値は、その稀少性により生ずるものであり、『それを有たんと欲する人々の富の程度および嗜好の如何により異なるものであつて』[1]、それが生產に費されたる勞働の分量に何等關する所が

1) Ricardo, Principles of Political Economy & Taxation, Gonner's ed. p. 6.
(堀學士譯本一一頁)

ない。而してこの種の貨物は、一般交換貨物の一少部分を占むるに過ぎないから、それが交換價値はこゝに問題とする所でない。一般的に貨物の交換價値の問題となるのは、交換貨物の大部分を占め、人間の勞働により任意にその分量を增加し得られ、且つそれが生產に自由競爭の行はれ得る所の貨物、卽ち前者の貨物の交換價値に就てゞある。

彼は、かゝる意義に於ける貨物の交換價値、卽ち交換に於て、一財に對して與へらるゝ他財の分量を決定する所の規則は、殆んど全くその各々の生產に費されたる勞働——こゝに勞働は、貨物の生產に直接費されたる勞働のみならず、その貨物を製作するための機械、道具、原料等に投ぜられたる所の間接勞働をも含む——の相對的分量に依ると云ふのである。[1] 換言すれば勞働の分量の增加は、それに勞働が加へらるゝ所の貨物の價値を增加し、その減少は、その價値を低落するのである。[2] 而してリカアドに於ては、スミスに於けるが如く、勞働の報酬(勞賃)の大小は、交換價値の決定に何等關係するところがないのである。

以上はその本來の形に於けるリカアドの勞働價値論の大要である。ところが彼は、資本の組成に差異ある場合(異なれる生產部門に於て)に於ける貨物の交換價値の決定を說明するに當り、右の命題をそのまゝ適用することができないのを發見し、遂にその命題に或種の修正を施さざるを得ざるに至つた。卽ち彼は、かゝる場合に於て、平均利潤が資本の組成の如何に關係なく、一樣に總ゆる資本に、その總額に應じて與へられると云ふ事實に當面して、勞働のみを價値構成要素とする勞働價値說にては、現實の貨物の交換關係を說明することができないのを發見して、遂に

1) Ricardo, ibid. p. 7. (同譯本一二頁)
2) Ricardo, ibid. p. 8. (同譯本一四頁)

價値決定の要素として、勞働の外に、利潤（更には勞賃）をも持ち來たるやうになつたのである。更に詳言すれば、彼は先づ第一に、右述べたる貨物の生産に投ぜられたる勞働の分量が、その相對價値を決定すると云ふ原理は、機械その他の固定的ならびに持續的資本の使用によつて著しく制限されると云ふ。[1] 彼れの詞によれば、『資本の持續性に異なる段階あるがために、――固定資本、流動資本と云ふやうに、また固定資本丈けに就て見ても、その間に各々持續性に差異があるやうに、[2] ――或は同じことではあるが、一團の貨物が市場に齎らさるゝ前に經過しなければならない時間があるために、貨物の價値は、その上に費されたる勞働量に正確に比例せずして、即ち二對一と云ふやうにならないで、それは最大の價値あるものが、市場に齎らさるゝまでに經過しなければならないより長い時間を償ふために、若干それ（勞働の分量）以上に昇ることになるであらう』。[3]

次にリカアドは前に、貨物の相對價値は、勞働の報酬如何によつて左右せらるゝことがないとしたが、この原理も亦、資本の持續性の不等、ならびに資本がその使用者に補償せられる速度の不等の事實によつて制限されると云ふ。[4] 即ち彼は云ふ、『また或種の生産に使用せらるゝ資本の耐久力に比して、その上にかゝる持續的資本が使用さるゝ所の貨物の相對價値は、勞賃と反對に變動するやうに思はれる。即ちそれは勞賃が騰貴すれば下落し、勞賃が下落すれば騰貴する。これに反して、價格を測定する媒介物よりも、より少い固定資本を以て、或はより持續性の少ない性質の固定資本を以て、主として勞働によつて生産さるゝもの〉相對價値は、勞賃の騰貴と共に

1) Ricardo, ibid. p. 23. (同譯本四四頁)
2) 譯者挿入
3) Ricardo, ibid. p. 27. (同譯本五一頁)
4) Ricardo, idid. p. 32. (同譯本六〇頁)

騰貴し、而して勞賃の下落と共に下落する』[1]、と。

かくの如くにしてリカアドに於ては、その初め貨物の交換價値若くは相對價値は、それが生產に費されたる勞働の分量によりてのみ決定せられたるものが、後に至りて勞働の外に利潤および勞賃も亦貨物の相對價値の決定に影響を及ぼすことが主張せらるゝに至つたのである。或るものはリカアドの價値論は、勞働價値論ではないと云ふ。兎に角彼れの勞働價値論が、終始一貫その純粹なる形を保つことができずして、遂に不純なる形に終つたと云ふことは、以上述べたる所により明らかである。かくて彼は、勞働價値論を從來のそれよりもより明瞭に徹底的に主張したるに拘はらず、勞働價値論より餘剩價値——利潤、餘剩價値率——一般平均利潤率の理論に移り行く經路を明確に意識することができなかつたのである。而して右の修正によつて、リカアドの勞働價値論は、幾多の勞働價値說の反對學者に依り、一般的に勞働價値論の到底支持すべからざるものであることの最もよい例證であるとせられて、常に價値學界に提供せらるゝの運命を負ふことゝなつたのである。

二

以上述べたる所により明らかなるが如く、リカアドは、その勞働價値論を本來の形に於て終り迄固執することができずして、遂に價値構成要素として利潤および勞賃をも（僅かの程度にてではあるが）[2]認めざるを得なかつたのであるが、私は、彼が意味する交換價値の概念、隨つて又それが構成內容としての勞働の概念よりしては、彼がかゝる經路を歩みかゝる到着點に歸着したの

1) Ricardo, ibid. pp. 35—6. (同譯本六八——九頁)
2) cf. Ricardo, ibid. pp. 30, 35. (同譯本五七,六八頁)

は正に當然であると思ふ。たゞしかし一般的に勞働價値論なるものが、所詮右と同樣なる經路を經ねばならぬものである、と考へるのでは勿論ない。完熟せる勞働價値論は、リカアドの勞働價値論とは異なれる諸內容を有つてゐるのであつて、それより見れば、リカアドの勞働價値論を以てしては、到底充分に交換價値、價値の本質を說明するに足らないのである。そうして私は、彼れの勞働價値論の根本的欠陷若くは不滿足は、彼が謂ふ所の交換價値、相對價値、比較的價値の本質、隨つて又それが構成內容を成すところの勞働の性質に就ての彼れの不充分なる、未熟なる見解に見出さるべきであると思ふ。私はこゝに、この點についての彼れの說く所を吟味し、何故に彼れの所謂相對價値が到底勞働價値の本質を說明するに足らないか、而して彼れの相對價値に對するかゝる態度よりしては、そが遂に一種の生產費說におち行くことの如何に必然の道行であるかを、從來の彼れの價値に對して加へられたる諸々の批評とは、全然異なれる立場に立つて瞭らかならしめやうとするのである。而して私は、かゝる態度を以てしてのみ、リカアドの勞働價値論を如實に解釋することができるのではあるまいかと思つてゐる。

リカアドが謂ふ所の交換價値、卽ち相對價値には、彼れの無意識のうちに、二つの意義が混淆して意味されてゐる。その一つは、勞働時間に依つて決定さるゝ所の交換價値であつて、後に述ぶる者に對して之は絕對價値と云ふことができる。他の一つは、一貨物の交換價値が他の貨物の使用價値で云ひ表はされたる場合に於ける相對價値であつて、これは狹義に於ける相對價値と云ふことができる。リカアドは、彼れの所謂相對價値に意味せられたるこの二つの意義を明白に識

別することができずして、ともに相對價値と呼んだ。そうして彼は、暗默の裡に朧げながら、前に意味する相對價値の存在を意識しつゝ、主として後に意味する相對價値をその研究の對象としたのである。

先づ彼が絕對價値を意味するが如き章句を、彼れの『經濟學及び租稅の原理』に就て搜し見るに、さし當り左の如き彼れの詞が見出される。

『若し貨物に實現せられたる勞働の分量が、その交換價値を左右するものとせば、勞働の分量の各增加は、それに勞働が加へらるゝ所のその貨物の價値を增加し、その各減少はそれを低落せしめなければならぬ』[1]。

『二つて貨物がその相對價値に於て變動を來たしたるとき、吾々は、その孰れに於てこの變動が實際起つたのであるかを知らうとする。先づ第一に、その中の一つの現在の價値を、靴、靴下、帽子、鐵、砂糖、及びその他の貨物と比較するならば、吾々は、そが總て以前と同じやうに、これらのものゝ同量と正確に交換さるゝであらうことを發見する。更に吾々が、今一つのものを前と同一の諸々の貨物と比較するならば、吾々は、そがこれらのものの總てに關して變動してゐるのを發見する。然る時、吾々は、變動はこの貨物によるのであつて、それと比較したる諸々の貨物にあるのではないといふことを、十中八九迄推測することができるであらう。若し、更にもつと詳細に此等各種の貨物の生產に關聯する總ての事情を調査せる結果、吾々が、靴、靴下、帽子、鐵、砂糖等の生產に就ては、以前と正確に同一量の勞働及び資本が必要であることを發見

1) Ricardo, ibid. p. 8. (同譯本一四頁)

するに反し、その相對價値が變化したる所のその一個の貨物の生産には、以前と同一量の勞働が不必要になつたといふことを發見するならば、蓋然性は確實性に變じ、そうして吾々は該變動がその一個の貨物にあることを確知する、かくて吾々はその變動の原因を發見するのである』[1]。

これらの詞は、彼が、假令意識的にてではないにしても、絶對價値の存在を意識してゐたのでなくしては、どうしても云ふことができないものであると思ふのであるが、なほ彼が同書第二十章『價値と富、それらの特性』に於て述べてゐる左の如き章句は、明らかに彼が暗默の裡に絶對價値を意識してゐたことを證するに足るのである。

『しからば、價値は本質的に富とは異なつてゐる。なぜなれば價値は、生産の豐富によつて定まるものではなくして、その難易によつて定まるものであるから。製造業に於ける一百萬人の勞働は、常に同一の價値を生産すべしと雖も、必らずしも同一の富を生産するとは限らない。機械の發明により、技術の改良により、分業の改善により、或はより有利なる交易の行はれ得べき新市場の發見によつて、一百萬の人は、一の社會狀態に於て、他の社會狀態に於て生産することが出來る所の富、卽ち「必要品、便利品、及び娯樂品」の分量の二倍或は三倍を生産することが出來るかも知れない、しかしそれだからとて、彼等は價値には何物をも附加しないであらう。なぜなれば、各々の物の價値は、それを生産するの容易又は困難に比例して、言葉を換へて云へば、その生産に使用さるゝ勞働の分量に比例して、騰貴したり又は下落したりするものであるから。』[2]

『總ての時に於て、それを生産するに骨折と勞働との同一の犧牲を要する貨物のみが不變なの

1) Ricardo, ibid. p. 12. (同譯本二——二頁)
2) Ricardo, ibid. p. 258. (同譯本二六五——六頁)

である、吾々は、かゝる貨物の存在を知らない。しかし假設的に恰も吾々がそれを知つてゐるかの如く、吾々はそれについて議し且つ論ずることを得るであらう。……』[1]

このリカアドの態度は、ベイリーをして、リカアドが屢々相對價値に就て云爲してゐると明言せるに拘はらず、その實、絶對價値の存在を信ずるが如き口吻を漏らすのは、所謂相對價値を二重に意義するものであるとして、彼を難ぜしむる所以となつたものであるが、しかし彼が、かく知らず〳〵の裡に、彼れの所謂相對價値に絶對價値を意味せしめたのは、貨物の交換價値の本質《彼は貨物の自然價格(交換價値)――その市場價格ではない――の本質を見んとしたのだ》を説明せんとする以上、無意識の間とは云ひ乍ら、實は止むを得ざるに出でたのであつて、彼れの本意は、交換價値を云ふ場合、常に相對價値を意味せしめたかつたのである。彼れの價値論は一般的に相對價値論であると云つて不可はない、(本質的には必らずしもそうではないが)。それで私は左に彼れの所謂相對價値の如何なるものなるかをやゝ詳しく吟味して見やうと思ふ。

リカアドはその價値論に於て、貨物の眞價値若くは絶對價値に對する標準を與へんとしたるものではなくして、貨物の現實の交換關係に對する一の規則を發見せんとし、而して相交換される貨物の交換價値は、それが各々生産に費されたる比較的勞働の分量により決定せらるゝとした。これ卽ち彼れの所謂相對價値である。今これを詳しく云はんに、A商品に投ぜられたる勞働の分量が、B商品に投ぜられたる勞働の分量に同じであるから、卽ち雙方の商品に或る等一なる內容實體(勞働)が等量に含まれてゐるから、A商品とB商品との交換價値は同じであると云ふのでは

1) Ricardo, ibid. p. 260. (同譯本二六九頁)
2) Bailey, S., A critical Dissertation on the Nature, Means and Causes of Value, etc., 1825.

なくして、A商品に投ぜられたる勞働の分量が、B商品に投ぜられたる勞働の分量に或る一定の關係の下に立つが故に、A商品はB商品と一定の價値關係の下に立つと云ふのである。而して彼はこれを相對價値と呼んだのである。マルクスが謂ふ所の、B商品の使用價値に表章せらるゝ所のA商品の交換價値が、卽ちこゝにリカアドの所謂相對價値たるに過ぎぬ。

今此點に關するリカアド自身の詞を彼れの著書に就て二三引用せんに、彼は言ふ。

『私が讀者の注意を惹かんとする所の研究は、貨物の相對價値の變動の結果に關するものであつて、その絕對價値のそれに關するものでないから、各異なれる種類の人間勞働を評價して、その比較的段階を研究することは、餘り重要ではないであらう。吾々は明に次の如く結論してもよい、――本來各種の勞働の間に如何に不平等があり、又或る種の手工的技術を會得するに他の種のものよりも、如何により多くの才能、熟練、又は時間を必要とするも、その間の關係は、一時代より次の時代に移つても、殆んど同樣であり、或は尠くとも、その變動は、年々極めて些少のものであるから、短期間の內に於ては、それは貨物の相對價値に殆んど影響を及ぼすことがない、と』[1]。

なほ次の如き言葉も見出される。

『猶ほ云つておかねばならぬことは、一貨物はそれに一〇〇〇磅となるだけの勞働が費され、そして他の貨物は、それに二〇〇〇磅となるだけの勞働が費されてゐるが故に、一は一〇〇〇磅の價値のものであり、そして他は二〇〇〇磅の價値のものであらうと、私は云つたのではなくし

1) Ricardo, ibid. p. 16.（同譯本二九――三〇頁）

て、私は、これ等のものゝ價値は相互の關係に於て一に對する二であり、而してこれ等の比例でこれ等のものは交換さるゝであらう、と云つたのであると云ふことである。これ等の貨物の一が一一〇〇磅で賣れ、他が二二〇〇磅で賣れやうと、或は一が一五〇〇磅に、他が二一〇〇磅に賣れやうと、それはこの學說の眞理にとつては重要のものではない。この問題は今研究しない。私はたゞ、これ等のものゝ相對價値は、その生產に費されたる勞働の相對的分量によつて支配さるゝであらうと云ふことを肯定するのみである』。[1]

かくリカアドは、A商品のB商品に對する相對價値は(その反對の場にても同じ)、A商品に投せられたる勞働量の、B商品に投せられたる勞働量に對する相對的關係であるとして、マルクスの所謂交換價値、價値の表章形態を取扱つたに過ぎぬのであるが、しかしその價値形態たるリカアドの所謂相對價値の概念は、相比較される二者の間に『普遍者』としての等一的勞働の存在が考へられなかつた結果、極めて曖昧のものであり、價値の表現形態卽ち交換價値の概念として頗る不滿足のものなのである。而してこの交換價値、價値の表章形態たるや、マルクスに依れば、單純、個別、或は偶生の價値形態——『一商品の單純價値形態は、それに含まれてゐる使用價値と價値との對立の單純なる現象形態である』、[2]——と稱せらるゝものであつて、それは、『自然により完全なる形態——總體的價値形態、一般的價値形態——に移り行く』[3]ものであるが、しかし彼は、價値形態、交換價値の秘密は、右の單純價値形態の本質を正當に理解することによつて瞭らかにせらるゝことができると云ふ。而してリカアドはそれができなかつたのである。(註一)

1) Ricardo, ibid. p. 39. (同譯本七六——七頁)
2) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksaus. S. 27. (高畠氏譯本第一卷第一冊五七頁)
3) Marx, a. a. O., S. 27. (同譯本同冊五八頁)

たゞしかし價値形態若くは交換價値は、畢竟價値の現象形態に過ぎない。價値形態より價値を說明せんとするは徒勞でなければならぬ。蓋し『交換が商品價値の大小を制定するのではなく、却つて反對に商品の價値の大小が商品の交換比例を制定するのであつて』[1]、價値は交換によつて甫めて交換價値に表章せらるゝに過ぎぬものであるからである。このことは、或る一塊の砂糖の重さは、これを測る前に已に定つてゐるのであるが、それは例へば鐵の目方と比較することによつて、始めて具體的に云ひ現はされることができると同じである。しかるに從來の經濟學者の多くのものは、この關係をアベコベに考へてゐた。（註二）リカアドもなほこの謬想より全然脫却することができなかつたのである。

抑も「一商品の單純なる價値表章が、如何やうに二商品間の價値關係内に伏在するかを見出すためには、先づ量的方面より全く切り離して、この價値關係を觀察しなければならぬ』[2]。何故なれば、『互に異なつた物の大小は、それを同一の單位に約元して見て始めて量的に比較し得る』[3]からである。卽ち或る一定の交換關係の成立は、必然的にそこに、互に通約し得る容積として、互に關係せしめらるゝ所の、或る質的等一性の存在を前提とするからである。リカアドが右述べたる交換關係を想定する限り、彼れは、何等かの兩者に質的に共通なる等一物を、朧げながらも意識してゐたのでなければならぬ。而して彼れは漫然それを勞働を以てしたのであるが、彼に在りては、後に詳しく述ぶるが如く勞働の二重性が、未だ瞭らかにせられて居らなかつた結果、そこに考へられたる勞働はマルクスの所謂個々的有用的具體的勞働に近いものであつて、兩者に共通

1) Marx. a. a. O., S., 29. (同譯本同册六二頁)
2) Marx, a. a. O., S. 16. (同譯本同册三二頁)
3) Marx, a. a. O., S. 16. (同譯本同册三二頁)

なる『普遍者』として受入れることのできないものなのである。こゝに私は、彼れの價値論の根本的欠陷が伏在してゐるのではあるまいかと思ふ。而してこの貨物の交換價値、交換關係若くは價値形態とその內在固有なる價値內容とを識別して、それらの本質を曉らかにしたのはマルクスである。(註三)

かくリカアドは絕對的なる價値の存在を明白に意識することが出來ずして、交換價値、相對價値をイヂクリ廻はすに過ぎなかつたことは、結局彼が交換價値、價値の現象形態それ自身の正體をも見屆けることが出來なかつたことを意味するのであるが、マルクスはこの點に就て左の如き詞を以てこのリカアドの態度を非難してゐる。

『商品特に商品價値の分解から、價値を交換價値たらしめる價値の形態を發見するに成功しなかつたことは、正統學派經濟學の根本的欠陷の一である。アダム・スミスおよびリカアドの如き正統學派經濟學の最良代表者でさへも、價値形態を、全くどうでもよいものとして、或は商品の性質そのもの以外にあるものとゝして、取扱つてゐる』[1]。(註四)

(註一) ツガン・バラノウスキーは、左の如くリカアドの價値論は相對的勞働價値論であるとして、絕對的勞働價値論と區別してゐる。しかしこの區別が、價値の相對價値と絕對價値の區別とに、何の係はりもないことは申す迄もない。

『リカアドの價値說は、相對的勞働價値說であると云ふことが出來る。何故なれば、そは勞働を價値の絕對的實體と見ないで、たゞ商品の價値を決定する相對的に重要なる根據であると見たからである。

『しかし茲に勞働を價値の絕對的實體なりと認むる所の、從つて絕對的勞働價値と呼ぶことができる所の、價値論がある。ロオドベルトス、および、マルクスの價値論がそれである』[2]。

1) Marx, a. a. O., S. 44, note, (同譯本同册九六——七頁)
2) Tugan—Baranowsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus, 1905, S. 135—6.

（註二）『吾々の分解は商品の價値形態若くは價値表章が商品價値の性質から生ずるものであつて、その反對に價値および價値の大小が、交換價値としてのその表章方法から生ずるものでないことを證明した。しかもこの後の方は重商主義者およびその近代的復興者たるフエリエー、ガニールなど並にその反對者たるバスチアおよびその一派の如き、近世的自由貿易旅行商の懷いてゐた迷想である。重商主義者は價値表章の質的方面、隨つて貨幣に於てその完成した形を有する商品の等價形態を特に重要視する。之に反してその商品をいくらでも賣り飛ばしてしまはねばならぬ近代的自由貿易旅行商は、相對的價値形態の分量的方面に特に重きを置くのである。されば彼等にとつては商品の價値の大小も、交換價値による表章、即ちたゞ日々の物價表に於ての外には存在しないのである』[1]。

（註三）『交換價値は先づ分量關係、即ち一種類の使用價値が他種類の使用價値と交換せらるゝ比例――この比例は時と所とに準じて絶にず變化する――として現はれる。故に交換價値は偶然的な純相對的なもので、隨つて商品に內在固有なる交換價値、即ち固有價値ありと云ふは、一の形容矛盾であるかに見える。吾々はこの問題を尙ほ詳しく考へて見やう』[2]。

『この勞働の性質をリカアドは研究しなかつた。それ故に彼は、この勞働と貨幣との關係、或はそれが貨幣として現はれねばならぬことを了解して居らぬ。即ち彼れは、商品の交換價値の勞働時間に依り決定せらるゝことゝ、商品の貨幣となる必然性との關係を理解してゐない。だから彼れの貨幣理論は間違つてゐるのだ。彼は初めから價値大小をのみ取扱つてゐるに過ぎぬ』[3]。

（註四）相對的價値と價値との關係に就てのマルクスの所說の一端を紹介すること左の如し。

『かくの如く價値の大小の實際の諸變化は、その相對的表章、即ち相對的價値の大小には一點の疑を殘さざるやうにも、亦一の餘す所ないやうにも反映するものではない。一の商品の價値は不變であつても、その相對的價値は變化し得る。又は價値は變化しても、その相對的價値は不變なることもあり得る。而して最後に價値の大小と價値大小の相對的表章とに同時に變化が起つても、其變化は必らずしも一致するとは限らないのである』[4]。

1) Marx, a. a. O., S. （同譯本同册五六頁）
2) Marx, a. a. O., S. 26. （同譯本同册四頁）
3) Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd.II,Teil I, S. 1.
4) Marx, Das Kapital,Bd. I, Volksaus. S. 21. （高畠氏譯本第一卷第一册四三――四頁）

マルクスに於ては、リカアドに於けると異なり、彼の所謂相對價値の外に絶對價値が認められてゐる。卽ちマルクスは、相對的なる交換價値若くは交換關係（價値の必然的表章法若くはその現象形態）の外に、それが內容實體を成す所の絶對的なる價値の概念を想定した。而して彼は、この價値概念を分拆解剖することにより、初めてそれが現象形態たる交換價値の眞相を會得することができると考へたのである。要する所、マルクスにありては、價値と交換價値とは同一物ではないのである。この二者の概念が明に識別せられて居ることは、彼れの價値論の最も重要なる特色を成すものであるに拘はらず、今猶ほこれを混淆して彼れの價値論を批評するものあるは寧ろ不思議と云はざるを得ない。而してマルクスはこの價値によつて交換價値の內容實體を成す所の『一般者』(Gemeinsames) を意味せしめやうとする。卽ち彼れの謂ふ所の價値とは、客觀的なる確定的のものであつて、異質勞働の相對的關係ではなくして、同質なる、たゞ量的に異なる所の平均勞働を意味する。かく勞働を單純平均勞働に還元して、そこに絶對的なる交換關係の內在的固有實體(價値)を見出さんとすることは、マルクス價値論に特有なる所であつて、リカアドに於て見ない所である。既に述べたるが如く、リカアドにありては、異なれる種類の勞働は、各々異なれる價値を有してゐるが、それらの勞働の價値評定は各時代を通じてほゞ同じであるから、貨物の相對價値が變化すると云ふのは、比較される孰れか一方に含まれてゐる勞働の分量が、他のものに含まれてゐる勞働の分量に對して相對的に增減變化することを意味すると云ふのであつて、二者の間に共通なる或物が、孰れか一方に增減變化すると云ふのではないのである。こゝに

兩名の價値論の根本的差異が横はる。

このマルクスの所謂價値は、彼によつて如何に說明せられてゐるか、少しく彼自身の言葉に就て窺つて見やう。

『更に二個の商品例へば小麥と鐵とを例にとらう。この二商品の交換比例は如何やうにもあれ、それは常に與へられたる分量の小麥を或る分量の鐵と等位に置く方程式、例へば1クォーターの小麥＝2ツェントネルの鐵を以て示すことが出來る。この方程式は何を意味するか？曰く同じ大きさの一の共通なるものが、二箇の異なれるもの、卽ち一クォーターの小麥と二ツェントネルの鐵との中に存在することこれである。故にこの兩者はそれ自體に於て小麥でもない又鐵でもない或る第三者に等しいのである。隨つてこの兩者の各個は交換價値なる限り、この第三者は約元し得られねばならぬ』[1]。

この共通物は諸商品の幾何學的、物理學的、化學的若くはその他の自然的性質ではあり得ぬ。それは最早や具體的有用的勞働より離れたる所の、互に相異なる所なき、總てが等一なる、人間勞働卽ち抽象的人間勞働の凝結であつて、マルクスはこれを交換價値に於て表章せらるゝ所の價値であるとした。而して彼に依れば商品の價値形態若くは價値表章が、商品價値の性質より生ずるものであつて、その反對に價値および價値の大小が、交換價値としてのその表章方法から生ずるものではない。このことは既に述べたる如くである。猶はこの勞働の性質に就ては、次節に於て詳しく述ぶる所あるであらう。（註）

1) Marx, a. a. O., S. 5.（同譯本同册五一一六頁）

(註) こゝに意味する絶對的なる價値の觀念は、已に朧げながらもアダム・スミスの價値論に於ても見出され得る(リカアドの價値論に於ても同樣にそうであることは既に述べた)。しかし乍ら彼れの所謂眞實の價格の概念、隨つて又それが構成內容を成す所の勞働の概念は、猶ほ勞働價値の概念として、隨つて又それが構成內容を成す所の勞働の概念として、不充分なるを免れなかつた。スミスのこの點に關する言葉の一端を引用すること左の如し。

『各々の物の眞實の價格、卽ち各々の物が之を獲んと欲する者に對し眞實に費さしむるところのものは、之を獲るがための骨折および困難 (toil and trouble) である……。勞働は、總ての物に向つて支拂はれるところの、最初の價格であり、本源的の購買貨幣 (original purchase money) である。世界の總ての富が本源的に購買されるのは、金または銀によりてではなく、たゞ勞働によりてである』。[2]

マカロックも價値に交換價値と眞價値とを認める。勿論それに附せられたる意義は粗雜なものではあるが。

「それ故に吾人は、一物品の交換價値、卽ちそが交換せらるゝ所の生產物若くは勞働の分量と、その生產費若くは通常云はるゝ所の眞價値——一物品を創めて生產獲得するに必要とせらるゝ勞働の分量——とを注意して分別せねばならぬ』。[3] (未完)

1) 河上博士『スミスの所謂「眞實の價格」について』(經濟論叢第十八卷第一號アダム・スミス記念號)參照
2) Smith, Wealth of Nations (Cannan's ed.) Vol. I, pp 32, 33.
3) McCullock, Principles of Political Economy. 1830, pp. 291－2.